

#### 4 新保満著『カナダ先住民デネーの世界』

明石書店、1993.9、P.251、¥2,575

農業総合研究所 須田 文明

昨年、国際先住民年であったが、先住民問題に関するかぎり、わが国は最も遅れた国の一つである、ということに異論はないであろう。それにたいし、本書が対象としているカナダは、憲法において、先住民権を保証している唯一の国である。こうした意味においても、デネー（カナダの「インディアン」）研究歴30年の著者の手になる、本書の出版は時宜を得たものである、といえよう。

さて、本書の第1章「ジョニーの半生記」では、現在60歳のデネーの男性のライフヒストリーを中心に、デネーの生活がいきいきと描かれている。第2章「デネーの世界とその環境」では、自然環境・社会環境についての概観が与えられる一方で、今度は、80歳のデネー女性のライフヒストリーを通じて、1950～60年代の彼らの生活の変動が考察されている。通常は、男性が狩猟を担うのであるが、男の子が死亡したりして不在の場合は、娘もハンターとして育てられる、というところが興味深い。第3章「デネーの「外の世界」の変動」では、デネーの生活における賃労働の一般化、および、それにとまなう貧富の差の拡大が論じられている。第4章「現代におけるデネーの世界」は、長老たちからの聞き書きを中心に構成されている。「今時の若いモンは、、、」という長老たちの嘆きは、よくみられる光景の一つであろうが、ここでは、こうした世代間のギャップをもたらすものとしての学校教育の役割が主題的に取り上げられている。最後の終章「カナダ先住民の現状と課題」では、けっしてバラ色とは言えない彼らの生活の問題点があげられ、とりわけアルコール問題が深刻となっていることが指摘されている。

さて、本書の特徴は、従来の研究にたいする批判的視点、あるいはタブーにたいする批判的指摘がみられることである。例えば、学校教育を通じて英語の読み書き能力を身につけた特定家族出身の若いデネーが、数少ない「白人の仕事」を独占している。こうした家族間での通婚がデネー社会の「上層」を形成していく、というのである。

ところで、本書が、専門外のわれわれにとっても興味深いのは、例えば、B.アンダーソンが指摘した以下のような事情からである。すなわち、「想像の共同体」としての国民・民族を生み出し、その特定の連帯を構築するのは、言語である、という事情。あるいは、パリバルが（留保をつけながらも）指摘した、「（民族）アイデンティティーは運動なくしては構築されないが、こうした運動は組織なくしては生起し得ない」といった事情である。こうした事情を念頭にいれて読むと、本書は、民族・国民のアイデンティティーを考察する上で示唆するところが多いであろう。